

胡耀邦総書記に問う

最近中国に気がかりな兆候が見えはじめた。たとえば、張香山論文だ！

胡耀邦来日の意味

コール・西ドイツ首相そしてレーガン・米大統領という西側最高首脳の来日に次いで、この十一月二十三日から一週間、胡耀邦・中国共産党総書記が政府公賓としてわが国にやってくる。今日の中国の実際上の最高首脳が鄧小平氏であることは周知のところだが、毛沢東時代のカリスマ的支配の象徴だった中国共産党「主席」を廃して、「赤い貴族」たちによる官僚的支配の時代になつた最近の中国の（書記長）制をとるようになった最近の中国の制度上の最高指導者が胡耀邦総書記なのだ。従つて、わが国にとってこの秋は、ソ連を

胡耀邦総書記



除く世界の大国の指導者が踵を接して来日する時期であり、長谷川慶太郎氏の言葉を借りれば、「経済大国」日本がいよいよ世界の「政治大国」になる日がやって来た、ともいえるのかもしれない。

そうしたなかで、胡耀邦総書記の来日は、とりわけ大きな意義をもっている。それは、胡耀邦氏がコール首相やレーガン大統領を凌ぐ大物だという意味では必ずしもないが、今日

なか
じま
みね
お
中嶋嶺雄

（東京外国語大学教授）

の鄧小平主導の官僚的リーダーシップがつづくかぎり、胡耀邦総書記や彼の後継者と自他ともにゆるす胡啓立・党中央常務書記などが中国の将来を担ってゆくであろうと思われるからである。「四つの現代化」を目指して経済的には「右」の開放体制をとりながら、政治的には「左」の締めつけを、最近著しく強化しつつある、その張本人が自由と民主の大海原のような日本へやってくるからでもある。

しかも、今回の胡耀邦氏来日は、彼自身にとつて、最初に訪れる資本主義国、つまり西側世界なのだ。一九一五年に湖南省瀏陽の貧農の

家に生まれた胡耀邦氏は、やがて中国共産党に入党して長征にも加わり、抗日軍政大学にも学んでいるが、一貫して党の組織面を担当してきた書記、つまり党官僚であり、建国後は長く共産主義青年団の第一書記であった。党中央書記処の鄧小平総書記とコンビを組み、鄧小平氏がもともと信頼する部下として活躍してきたのである。文革で失脚、そして復活、天安門事件で再失脚、そして再復活とつねに鄧小平氏と歩みを共にしてきたことも、彼の大きな政治的資産になっている。その胡耀邦氏は、過去三十年間に、青年友好組織や国際共産主義運動関係として党・政府の公式代表としてソ連、東欧諸国をしばしば訪れ、最近ではカンボジアや北朝鮮も訪問しているが、いずれも社会主義国ばかりであり、西側諸国を訪れたことは一度もない。

それだけに、胡耀邦氏自身が今回の訪日に大きな関心を抱いていることは、これまでにしばしば報じられた。典型的な党官僚として、共産主義思想や社会主義体制への中国内部からの不信任や異議申し立てを徹底的に抑えてゆかねばならない胡耀邦総書記の目に、わが国の今日の自由や繁栄がどう映るのか、おそらく驚嘆の念を禁じがたいと思うのだ、ありのままの日本をありのままに見ても

らうのが一番よい。

当初の予定に考慮されていたフシがある目の田中角栄邸訪問は、さすがにとりやめになつたけれども、伝え聞くところによると、青年組織のリーダーであつただけに、わが国の青年層との大衆的交流を当初は希望していたという。政府公賓であるうえに、日本共産党と中国共産党との関係が依然として修復されてない現状では、日本共産党の青年組織・民青との交流というわけにいかないこともあって、この計画も「青年との集い」での講演程度に縮小されたようであるが、だとすれば若者の実際にふれてもらうために、原宿か六本木あるいは吉祥寺あたりへ案内するのがもっともふさわしいのかもしれない。

もとより、胡耀邦来日の結果、ブルジョア的自由や資本主義的繁栄を目の当りにして、その果実を中国の近代化のために大いに取りいれてくれるだろうといった期待はもたない方がよいだろう。そもそも胡耀邦総書記は、一連の発言からしても、その経歴からしても、まぎれもなく「赤い貴族」の筆頭に位置する人材であり、今日の中国指導層のなかでは、「中ソ改善派」のリーダーとも目される人物であるだけに、中国と日本との、そして社会主義と資本主義とのあまりにも大きな格

差（たとえば一人当たりGNPでは一対四〇）を目撃して、日本や西側に学ぶどころか、こうまで違うからにはモデルにはならないと考へて逆に反撥し、社会主義の優位性や共産主義思想の勝利を従来以上に唱えることになる可能性も大きいからである。

胡耀邦氏は、この夏、中国の当面の重要な外交課題の一つである香港問題について発言し、香港に隣接する中国の経済特区・深圳が成功のモデルだとして、「われわれは深圳に経済特別区をつくらせて繁栄の典型をつくりだした。典型をつくりだせば香港の繁栄維持も実現できる」と語ったという（山内大介・毎日新聞社長との八月十五日の北京での会見、『毎日新聞』一九八三年八月十六日）。

私はこの夏、香港も深圳も訪れたが、深圳は「繁栄の典型」どころかただの工事現場にしかすぎず、香港の繁栄とは比べべくもない（詳しくは拙稿「英中の同床異夢・香港返還問題」、「諸君！」一九八三年十一月号参照）。右の胡耀邦発言程度の資本主義認識しか中国の指導者ももっていないのだとしたら、大変な事実誤認でもあるので、来日した胡耀邦総書記には、その辺の認識を正すようわが政府・外交当局は率直に語るべきではなからうか。なぜなら、もはや御祝儀外交としての日中

友好時代は終わったのであり、同時に最近の中国側には、中ソ接近に伴う中国の世界戦略の転換とともに、再び「日本軍国主義」や現代日本を批判しようとする潮流が見えかくれしているばかりか、かつての毛沢東時代、文革時代に逆戻りしたかのような一方的な論難、つまり日中非友好の暗流が動きはじめているからである。

驚くべき張香山発言

このような暗流は、昨夏のいわゆる教科書問題での中国側の「日本軍国主義」批判や最近の映画『東京裁判』をめぐる『人民日報』その他の論調にも明らかのように、中国側の立場からする基準を絶対化して一方的に日本側を批判しようとする態度の再現として、このところ目立ってきている。

そうした中国側の姿勢のもっとも典型的な事例は、去る八月二日付の『北京周报』第三十一号に載った「新たな飛躍的發展を望む」と題する張香山・中日友好協会副会長の文章だといえよう。『北京周报』は、中国の対外広報誌として知られているが、この八月一日は『北京周报』日本語版創刊二十周年であった。その二十周年を祝って、中国共産党政治局員でもある王震・中日友好協会名誉会長と

ともに張香山副会長が右の文章を寄せているのだが、このような祝賀文としても、また、日中関係の過去に照してもきわめて異例なことに、その文章の大半を、日本の「ある中国問題研究者」、すなわち私個人の見解への批判に当てているのである。

張香山氏は、知る人ぞ知る、日中関係における中国共産党の最高責任者である。国際共産主義運動や友党関係さらには「革命外交」のレベルで中国の対外政策を立案指導する党中央対外連絡部に所属し、現在も同部顧問をつとめるイデオログであり、これまで日本共産党や日本の平和運動、日中友好運動などを指揮したり操作してきた工作者兼お目付役でもある。それだけに、日中友好関係者のなかにも張香山氏を嫌う人びとは数多いが、あたかも日ソ関係において、ソ連共産党中央委員会国際部の日本担当責任者コワレンコ副部長が果たしているような役割りを日中関係で演じている人物こそ張香山氏なのである。今日、孫平化氏と並んで中日友好協会副会長の地位にあるが、中国の場合、「副」という肩書の役職がしばしばもっとも重要なポジションなのであって、この点で張香山氏の政治的役割りは、廖承志会長亡きあと中日友好協会会長に就任した劇作家の夏衍氏の比ではな

い。

では張香山副会長は、どのように語っているのか。氏は、文章の前半部分で、「両国民の友好は単に善良な願いまたはムードのうえにうち立てられるものではなく、友好関係の樹立と発展には両国民の相互理解が欠くべからざる重要条件の一つだ」と、まさに私としても大賛成の「正論」を提起し、そのために『北京周报』日本語版はうますたゆまず、さらに努力しなければならぬ」と述べたあと、一転して筆鋒を変え、『北京周报』は同時に「中国に反対し、または中国を敵視する日本の一部世論に対し必要な反応を示し、論評を加えることに真剣にとりくむ必要



が出てくる」と強調しているのである。しかも、「わたしがいうのは、大日本愛国党党首赤尾敏のような反共、反中国騒ぎではない。かれらには日本国民を騙すことなどあまりできないからだ」として、「わたしのいうのは、中国問題研究者といわれる人たちの言論である。かれらのごく少数は、公正かつ科学的な態度で中国問題を研究するのではなく、中国に對しなにかの先入観を抱いており、あるいは非友好的ないし悪意の態度をとり、中日友好に對して否定的である」と指摘したのちに、三点にわたって、私の一連の見解、具体的には昨年三月八日から十五日まで『サンケイ新聞』に連載された「日中国交正常化一〇年」記念のインタビュー（「進路をきく」、聞き手・住田良能記者）をはじめとする私の最近の一連の見解を非難し、『北京周报』は今後、私のような見方に反撃すべきだとして、『北京周报』の編集方針を叱責し、「初めからやり直す必要がある」とまで激しく迫っているのである。

中国側の日中関係最高責任者がこのように一個人の研究者にすぎない私の中国観をとりあげて、文章の大部分を私の見解への批判に費し、そのうえ、編集方針にまで容喙するといふ異常さにも啞然としたが、ここではまず、

張香山氏の文章を以下に紹介しておきたい。

ここで、ある中国問題研究者の言論を見よう。

「はたして日中関係の正常化はデタントに役立ったかという点、そうばかりはいえない。逆にアジアの緊張は非常に増大している」。「ソ連をはじめ中国の周辺諸国を非常に刺激した」。このような論調は、中日兩國の国交回復は、アジア・太平洋地域の安全と安定に大いに役立つとするわれわれの考え方と真つ向から対立している。

この研究者は、中日平和友好条約に對しても否定的で、「日中平和友好条約の締結」で「日本が徐々に中国の世界戦略のなかに組み込まれる」といつている。かれはソ連の北方四島不法占領を中日兩國が平和友好条約を締結したせいにさえている。かれは、中日平和友好条約に反霸權条項が盛り込まれたので、「（ソ連は）当然対日報復に出た。まず第一に北方領土の軍事基地（化）」。これにより日本にとって重要課題である北方領土問題というのは、ほぼ半永久的にありきらめなければならないような環境をみずからつくってしまった」といつている。このような考え方は、独断的でもあり、人心

を惑わすものでもあり、中日平和友好条約に反對するよう日本国民を扇動するものである。

この研究者はさらに、「まさに赤い貴族の独裁体制が進行している」と中国共産党の指導機關を露骨に攻撃した。

このような論調は、日本国民が中国を客觀的に、正しく理解するのを妨げ、中日兩國の善隣友好関係を損ねるものである。これに對し、『北京周报』日本語版は無関心であつてはならず、齒に衣を著せず反論すべきだと思ふ。そうしなければ、『北京周报』日本語版は生き生きして鋭く、鮮明であるという特徴を備えることができない



御歳暮

泉屋のクッキー

本社 東京都千代田区麴町3丁目1番地
〒102 電話 東京(261)5541(大代表)

し、したがって多くの読者を引きつけることもできない。この面では、『北京周报』日本語版は初めからやり直す必要があると思う。

以上が張香山副会長の私への批判と『北京周报』への叱責だが、この部分への反論は、きわめて容易である。なぜなら、張香山氏の批判は、「実事求是」の精神にまったくもとるばかりか、いずれも一方的な非難にしかすぎないからである。だが、無視できないのは、あたかも私の自主的な言論活動が、「日本国民を騙す」ため、「人心を惑わす」ため、「中日平和友好条約に反対するよう日本国民を扇動する」ためであるかのように論断している、その発想のおぞましさである。私の言論活動を知る日本の多くの読者が理解して下さるよう、私自身はこれまで、自らの学問的信念に基づく言論を展開したのみであって、日本国民を惑わしたり、煽動したりなどとは考えたこともない。私の中国観が中国当局から見ても好ましくないものとしても、それで日本国民が惑わされたり、煽動されたりするなどと考えることも、日本国民にたいする侮辱である。しかも、張香山論文の主旨からすれば、日本の中国研究は中日両国の善隣

友好関係に奉仕するものでなければならぬという結論が導き出されるが、それこそ学問の政治への隸属であり、中国においてはともかく、わが国においてはまったく適用しない論理である。学問研究は、現代中国研究を含めて、ア priori に国家間の友好関係に奉仕するために存在するのでは決してない。結果的にそのような貢献をすることは好ましいであらうが、もしも日中友好のために中国研究が必要だというのなら、本末顛倒も甚だし。毛沢東時代、文革期のわが国の中国研究が陥った罅りを一瞥しただけで、このことは明瞭なはずである。にもかかわらず、依然として張香山氏が右のような暴論を吐くということは、氏自身が文革型、毛沢東型の、あるいはまたスターリン主義的な誤謬の体験から何も学んでいないことになる。

以上のような前提のうちに、張香山氏の指摘する三点について、反論しておきたい。

まず第一に、日中関係の正常化が一方でアジアの緊張を増大させたという私の主張にかなしてであるが、私は日中関係の正常化を六〇年代のもっと早い時期から主張してきた者の一人として、中ソ対立、米中接近という七〇年代初頭のような米・中・ソの角逐する国際環境のなかでの日中国交がソ連や中国周辺

—そえて真心に味ぬらわ—



秋田銘葉 金 萬

金萬本舗 秋田駅前 ☎018826789

諸国を大いに刺激し、緊張緩和への期待とは逆に、アジアの緊張を高めたことは事実だと考えている。もとより私のみならず、日本を代表する国際政治学者の永井陽之助教授も、私のような見解に立っていた（永井陽之助「日中復交の虚と実」、『多極世界の構造』、中央公論社、一九七三年所収、参照）。こうした事実を指摘することが、たとえ中国当局の見解と「真っ向から対立している」としても、それは中国敵視でもなければ、日中非友好でもあり得ないではないか。意見が違えば敵対であり、反中国だというのなら、もはや何をかいわんやであり、張香山副会長自身、共産主義者として、わが国の政府・自民党首脳と

は根本的に意見が違うはずである。

第二点は、日中平和友好条約とその国際的波紋についてである。まず私は、日中平和友好条約一般にたいして否定したことは一度もない。私が否定的だったのは、明らかに中国の当時の(現在は中国自身がまた変っている)反ソ世界戦略の反映としての「覇権条項」入りの日中平和友好条約にたいして否定的だったのであり、この点は今も変わっていない。

「日中平和友好条約の締結」で「日本が徐々に中国の世界戦略のなかに組み込まれる」との見方も当然であり、現に組み込まれたのであった。「かれはソ連の北方四島不法占領を中日両国が平和友好条約を締結したせいにさえしている」というようなことは、ソ連の北方四島不法占領が日中平和友好条約締結以前の第二次大戦終結時以来なので、それ自体あり得ないことであり、私がそのようなことを

言うはずもなく、論点の歪曲である。一方、ソ連の対日報復として北方領土の軍事基地化ははかられ、その結果、わが国にとって、北方領土問題がきわめて厳しいものになったことは事実であり、このような結果が招来されるであらうことは、かねがね私が主張してきたところである。もとより私のみならず、最近、日中平和友好条約をめぐる国際関係にかんして『これれやすい協商——国際的文脈から見た一九七八年の日中平和条約——』と題する注目すべき著書を刊行したアメリカの専門家ロバート・E・ベデスキ教授も、日中平和友好条約によって日本が中国の世界戦略に組み込まれたこと、その結果、ソ連を大いに刺激し、北方領土問題を含む日ソ関係が著しい困難に陥ったことを強調している(Robert E. Bedeski, *The Fragile Entente: The 1978 Japan-China Peace Treaty in a Global*

Context (Boulder, Colorado: Westview Press, 1983. 参照)

第三点は、私が中国の当面のリーダーシップを「赤い貴族の独裁体制」と特徴づけていることにたいし、それを「中国共産党の指導機関を露骨に攻撃した」と見做していることについてである。たしかに私は、当面の中国のリーダーシップを毛沢東型のカリスマ的リーダーシップに代る党官僚主導型の官僚的リーダーシップだと規定し、それを「赤い貴族の独裁体制」だと随所で語っているが、そのことは中国共産党の指導機関への攻撃などではあり得ない。「赤い貴族の独裁体制」とは、いわば「ノーメン・クラトゥーラ」のシステムであり、当然、ソ連共産党にたいしても、使い得る規定である。今日の中国共産党は昨年九月の十二全大会以降、とくに党の書記処の機能を著しく強化し、まさに党官僚独裁体



エメラルド プラン

ウイークディ・ウェディング

八芳園が幸せへと出発つお二人にお届けする、ゆったりと豪華な「エメラルドプラン」。数々の特典をご用意してお待ちいたしております。——

●実施期間—1984年1月5日—12月29日



緑の中の結婚式場



八芳園

東京都港区白金台1-1-1

電話443-3111(代)

(目黒・五反田・品川駅より車で5分)

制へと移行しつつある。私は、今の張香山副会長にたいしても、「あなたこそ赤い貴族の典型ですよ」と言いたいところだが、残念ながら私はむしろ、鄧小平・胡耀邦・胡啓立といった党中央書記処や共產主義青年団系統の党官僚層こそ、今日の中国のリーダーシップを担うラインだと見做しているのである。これらの中国共産党のリーダーたちが民主化要求を徹底的に抑えて一党独裁体制のもとに君臨し、しかも様々な特権を享受していることは周知のところである。『鄧小平文選』自身、そのような高級幹部の特権化現象を認め、その是正を訴えているではないか。

このような事実を「赤き貴族の独裁体制」と規定して記述することが不当だというのなら、中国共産党の指導者自身が「赤い貴族」であることをまずやめなければならない。

中国研究と日中友好

以上で見てきたように、張香山副会長の主張は、「中日友好」のためにも、「両国人民の相互理解」のためにも、あり得べからざる暴論であり、ましてや言論の自由が完全に保証されている日本国内での私の言論活動にたいして言うべき事柄ではない。わが国の側は、中国側がいかに『人民日報』その他で『日本

軍国主義』を批判しようとも、中国国内の言論を一方的に論難したり、統制したり、検閲したり、また『人民日報』関係者の訪日を制限したり、同紙記者を追放したりなどしたことがない。しかし、中国側は、過去において美術品輸送もたけなわ検閲や追放をおこなったのであり、それこそ内政不干涉の原則や言論表現の自由の原理にたいする侵害であった。当の『北京周报』の同じ号に載った元北京周报社日本語版社員の高敏孝氏が「二十周年に思う」と題する一文で『北京周报』（日文版）二十周年のばあい、私の記憶は苦汁にみちている」と述懐し、文革当時の誤りを顧みて、現在「何よりもうれしいのは、みなが思うことを自由に話すようになったことだ」と語っているように、中国当局こそ、大きな誤りを重ねてきたのであった。

しかも、「中国に反対し、または中国を敵視する」というけれど、いったいどの時期のどのような部分の中国にたいしてなのかという問題も存在する。私は、中国評論の筆を執るようになってから、一貫して毛沢東中国や文化大革命に批判的であり、従って、その限りでは「中国に反対し、中国を敵視」したのかもしれないが、たとえば亡き廖承志氏は、文革中、私の言論を読んで慰められた旨のメ

話のこみテナ

No.254



★この秋、

芸術の秋たけなわ、各地で美術展や展覧会が開催されているが、その開催の裏方として、貴重な出版物の輸送に活躍しているのが、日通の美術品輸送隊。

そこで、これに因んだ話題を二つ。

一つは、日通所蔵の故・前田青邨画伯の名画『唐獅子』（六曲一双）の東京国立博物館への寄託。さ来年は同画伯の生誕百年に当たり、これを記念して「前田青邨とその弟子」展なども開催されているが、画伯の代表的な作品を一企業が所蔵しているよりは、広く愛好家に鑑賞いただきたいと寄託したもので、搬入の作業は、もちろん美術品輸送の専門スタッフが担当した。

もう一つは、ニューヨークの国連本部の要請に応じて、長崎市の浦土教会から被爆の証人平和の使者として旅立った「聖アゲネス像」の輸送。

この像の寄贈に先立って、長崎市では市民にカンパを呼びかけ輸送に相当する輸送費を募

「サージを生前私に伝えて下さったものである。張香山副会長の同僚の孫平化副会長でさえ、文革中の日本の中国研究者の毛沢東礼讃、文革一辺倒がいかに誤っていたかを認めたいとして、一九八〇年夏に北京の友好賓館で私にたいして、「それは中国側にも責任があります。これらの人びとは中国側の主張を鵜呑みにして発言したのだから、私たちは同情しなければなりません」と長々と述べられたことがあった（拙著『北京烈烈』〈下〉、筑摩書房、一九八一年、参照）。

それとも、張香山氏は、つねに中国のその時代の権力者に迎合する言論のみを日本の中国研究者に期待し、要請しているのであらうか。そのような言論活動がいかに空しいものであったかについては、今日、日本の代表的な親中国の研究者であった人びとでさえ、明らかにみずから過去の過去を語っているのである。たとえば、新島淳良氏は、そのような立場の代表的な中国研究者であったが、氏は、現在、みずからが主宰する新島私塾の機関紙『彷徨』に氏自身の半生をふりかえって「自伝のようなもの」と題し、かつて日本共産党の支配下にあった親中国の中国研究機関・中国研究所の活動の内幕や自己の二重の研究態度や言論活動についてありのままを書き記す一方、

「文革支持者でない人間は中国研究をすべきでないという雰囲気がある。当時の親中国派の中にあった」と述べて、あれほど文革を礼讃した新島氏も「文革中の中国がどんなにひどい実状であったかは知っていた」こと、しかし、そのことは書かずに「伏せていたけれど、中国で行われていることはメチャメチャだった」とかつての仲間とともに赤裸々に語り合っている（小島晋治・新島淳良・吉田富夫・石田米子「座談会」いま、中国研究をふりかえって、『中国研究月報』、中国研究所刊、一九八三年三月号、参照）。

だが、張香山副会長には、新島氏ほどの知的誠実ささえ失われているのではない。

想えば、私にとって張香山氏は大変印象深い存在である。それは、張香山氏がかつてわが国の安保闘争を総括して、『紅旗』一九六二年第二十号に「日本人の闘争と日本共産党」と題する長大論文を書き、六〇年安保は、「日本共産党の指導による反米愛国闘争の偉大な勝利」だと権威にものを言わせて主張したからであった。私は処女作『現代中国論』（青木書店、一九六四年）のなかで、右の張香山見解は「実事求是」にもとる事実認識の誤りだと批判したことがあるが、それは私自身が六〇年安保の世代として、張香山型の安

ったが、日通もこの市民の善意に協力して、



美術品輸送の専門家の立場から、像を傷つける危険性の少ない航空便での輸送を提案、費用もカンパ金の枠内で、航空輸送をお引受けし、無事に国連本部へお届けした。

因みに、こうしたかけがえのない貴重な品物を扱う美術品の輸送は、梱包、搬出、輸送、搬入、開梱、陳列など、すべての作業で絶対にミスは許されない。計画は綿密に、作業は慎重に、防犯は勿論、輸送中の振動防止、温度、湿度の調整など科学的な技術も要し、特別な教育を受けた経験深い専門のスタッフだけが担当する。近く日通が幹事役となって美術品輸送業者国際会議が日本で開催されるが、これまでもミロのピナスやモナリザなど門外不出の美術品を運び、今でも国際・国内合わせて年間三百数十の展覧会を手がけている日通の技術とノウハウは、世界の同業者からも注目されている。（日本通運）

うすくちは控えめに
お使いください

なもてなしの手料理も……



★製造元▽兵庫県豊野市 ヒガシマル醤油株式会社

保闘争認識に反撥したからだけではない。

「米軍占領下に苦悶する日本人民」、「反米愛国闘争に立ち上がる日本人民」式の中国の日本認識そのものがあまりにも一方的だったからである。当時の中ソ論争ともからんで中国共産党は日本共産党をあれほど高く評価していたにもかかわらず、やがて日中両党は一九六六年春の毛沢東「宮本会談」を契機に決裂し、以後、張香山氏も文革期には一時姿を消していたが、まもなく日中関係の重要ポストに復帰するや、再び日中友好協会（正統）や日本社会党、公明党、各レベルの日中友好訪中団さらには学生訪中友好参観団などに中国側の基調見解を表明して、対日「革命外交」の先頭に立ってきたのであった。いま、私の研究室にある「張香山言行録」のファイルを引き出せば、その数は枚挙にいとまがないほどである。四人組時代には、「批判批孔」運動

に与して、中国共産党十全大会での王洪文の党規約改正報告をたたえたりしているので、張香山氏はいま中国でまさに始まろうとしている整党運動の対象になるのではないかと私はいささか心配であり、あるいは上記のような強硬発言は、そのような張香山副会長の立場の自己防衛のためのものかもしれない。いずれにせよ、このような張香山氏に、私の言論を批判する資格があるのだろうか。

率直な批判が必要

だが、「北京周报」は、さすがに權威に弱いのか、上記の張香山発言に早速応えて反論を開始した。同誌九月六日付の第三十六号は、「荒唐無稽な非毛化」と題して、安治園・政治担当編集者が、「最近、西側の一部の『中国問題評論家』は、毛沢東氏が逝去した後の中国で『非毛化』に拍車がかけられていると

さかんに宣伝している。これは根も葉もないことである。実際に存在していない『非毛化』と鄧小平同志を結びつける言い方はいわない虚言である」等々と、これまた私の非毛沢東化（De-Maoization）についての見解を批判しはじめた。今日の中国が非毛沢東化をイデオロギー上のみならず制度のうえでも政策のうえでも推進していることは明白であるが、非毛沢東化への抵抗や将来への不安のためであろうか、鄧小平指導部はここに来て、鄧小平氏自身は全面的な非毛化にそもそも反対していた旨をしきりに強調しはじめている。「鄧小平文選」の刊行は、そのことを言いたかったからだとも見做されよう。しかし、もしも亡き毛主席がいま生きかえったとしたら、一九七八年暮れの三中全会以来の方針を許容するかどうかを考えただけでも、この問題についての解答は自明であろう。

祭り歳時記

いい旅に心をそえて



11月下旬 報恩講

金沢



金沢ニューランドホテル

金沢市高岡町(尾山神社正面)
☎大代表(0762)33-1311



妙高

俳人一茶をしのんで、
新そばを味わうも
また風流。

11月19日 柏原一茶忌



妙高ニューランドホテル

新潟県中頸城郡妙高高原町新赤倉
☎大代表(02558)7-2558

電話予約センター

- 東京 (03)663-0994
- 名古屋 (052)482-0994
- 大阪 (06)261-0 4

こうした反論に加えて、同じ『北京周报』は、「読者の声」欄で、「張副会長の指摘に賛成」という投書を掲載している。これなどはあまりにも作作的ではなからうか。恐ろしいことである。

しかし、去る九月下旬には、本来、中国に深い理解を示してきたアメリカの著名なジャーナリストで名著『歴史の探究』（邦訳、サイマル出版会）の著者セオドア・H・ホワイット記者の「毛沢東の亡霊を追放」と題する表紙画（鄧小平の背後に毛沢東の亡霊が見える）つきの記事を載せた『タイム』（九月二十六日号）を中国国内で発売禁止にしたり、同じ九月下旬には鄧小平氏の健在ぶりを示す游泳写真を毛沢東晩年の長江游泳写真と同様に公表したり、先には『毛沢東語録』同様に『鄧小平文選』が大量刊行されたりしたところを見ると、最近の中国内部には本当に毛沢東の亡

霊が存在しているのかもしれない。

だとすれば、鄧小平氏にとっての最後の賭けは、この秋から三年がかりで始まる整党運動に全面的に勝利する以外にはない。整党運動は、最終的に四千万中国共産党員の党員証書き替えを伴う「鄧小平粛清」であり、かつての文革派や毛沢東派の根こそぎの追放を目指すものだといえようが、しかし、中央レベルの非毛沢東化とは異なり、中国社会の底辺にへばりついている人員の入れ替えを要するだけに、すでに各地でかなりの抵抗も起っている。

この八月初旬以来の中国で相次いで断行されている犯罪者の摘発、大衆への見せしめ、そして一説にはわずか二カ月で数千名を超えたといわれる公開死刑の実行は、そのような賭けをよぎなくされている鄧小平氏ら赤い貴族たちの苛立ちとあせりの反映なのかもしれない。

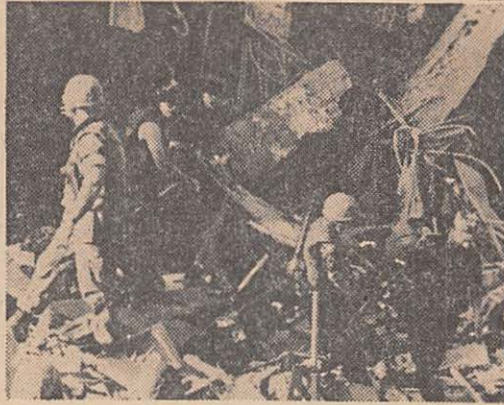
わが国のような自由と民主の社会では考えられない事柄が断行されているところに今日の中国の現実があるのであり、そのような見せしめや大量処刑は外部世界の中国イメージを大きく損っているばかりか、当の中国の将来にとっても大きな代償を要求するのではなからうか。たとえ兇悪犯罪であろうとも、彼らは結局、毛沢東政治の犠牲者にほかならないからである。

むしろ、こうした中国の現状への率直な批判こそいま必要だともいえるのであり、日中友好のためにもお世辞や迎合でない中国観こそが自由に表明されてしかるべきであろう。

では胡耀邦総書記は、今回の張香山発言をどう考えているのだろうか。この際は日本をじっくり参観のうえ、この問題についても是非解答されんことを希望している。

また石油ショックが来る!?

レバノンの大量テロ、イ・イ戦争の激化で第二次国際テロ時代に突入



10月23日、爆破されたレバノンの国連監視軍米軍司令部

によって爆破された。……

……こうした事件勃発から十二時間後、日本外為市場や株式市場は大混乱し、円と株は大暴落し、市場はまもなく閉鎖されてしまった。やがて首相官邸では総理の緊急記者会見が行なわれたが、日頃理路整然とした雄弁で鳴る総理も、この日ばかりは支離滅裂で何をいつているのかまったく理解に窮するものであった。まさにこの総理の記者会見の姿こそは、何らなすすべもなくやがてやってくる日本国経済の壊滅的崩壊の象徴的前ぶれであった。……

……こうして日本はもとより全世界を巻き込む重苦しく出口の見あたらない第三次石油ショックと世界大恐慌の幕が切って落された

小^お山^さ内^{ない}高^{たか}行^{ゆき}

(外交評論家)

のであった。……

こうした筋書きは、中東を研究する私の脳裏から片時も離れることのない想定である。日本人が最も知りたい点は、中東といえは石油ショックの再来がありうるのか、ということであろう。私見だが、五〇〜六〇%の確率でおこり得ると警告せざるを得ないのである。

もっともこの筋書きは、私の持っている数多くのシナリオの中でも最悪のものの一つではある。しかもこの筋書きにおいては、戦後三十八年にわたり培養されてきたエゴむき出しの醜い日本人の姿が、この一点にあますことなく発揮され、修羅地獄の如き惨状を呈す

一九八×年×月×日、ホルムズ海峡は何者かの手によって封鎖された。原油を満載した日本の多くのタンカーは、その細長い出口で立往生している。同時刻ペルシア湾岸のガバール油田(サウジ・アラビア最大の油田)が、またカーグ島の石油積み出し基地(イラン唯一の積み出し基地)が、相次いで何者かの手